特集■法然上人八百年御忌、浄運寺開創八百年

念仏すけささぬ人（四）

―角張成阿のこと―

東北大学名誉教授　髙橋　富雄

力者棟梁のほまれ

王法も三舎を避けてや念力者
師恩かく輿に道譲りけり

わたくしは、この浄運寺が育ての親の旧著『評伝角張成阿弥陀仏』において、四国配流のいたましい流刑に処せられた法然上人に、「力者の棟梁」として従駕した角張成阿のことについてふれ、いささか新しい情報を提供しておきました。

それは、このことに関する『四十八巻伝』と『正源明義抄』の記事の違いに注目して、本来、流人法然上人事、改め藤井元彦護送として警邏の官卒中心の輸送隊編成に、例外として上人門弟の随行も認められたとする『正源明義抄』記事が正解で、それを何か全員、上人門下の僧侶たちによる護送だったかのように記載する『四十八巻伝』は、事実に合わない舞文と見るよりほかない、という趣旨でした。

これは『正源明義抄』の歴史資料としての事実の確かさを立証することを主眼としたもので、その点で正しかったのですが、他方で『四十八巻伝』の持つ「もう一つの歴史的真実」文学的に所謂「虚構の真実」にふれることのなかった点でバランスを欠きました。ここではその補論をしておくのです。そして、そうです。あの大原談義のプロローグ（前口上）に勝るとも劣らぬ「師上人名誉の復権」をなしとげた角張成阿のはたらきを承けて、「四十八巻伝虚構の真実」になったストーリーを物語っておくのです。

まず原文を掲げておきます。

〈『四十八巻伝』〉　三月十六日（建永二年。一二〇七）花洛をいでて夷境におもむき給(ふ)に、信濃国の御家人角張の成阿弥陀仏、力者の棟梁として、最後の御ともなりとて御輿をかく。おなじさまにしたがひたてまつる僧六十余人なり。

〈『正源明義抄』〉　多年受学の恩徳、常随給仕のよしみ、昼夜明暮の御名残なれば、声をあげて泣(き)悲しむ。公方の御力者をばのけて、角張の成阿・沙弥隨蓮・覚阿・道仏等を力者の棟梁として、御弟子十二人は、公方よりの御供惣じて六十三人、御輿の前後につきまいらす。

国事犯護送です。「公方の御力者」主体になるのが当然です。従って、「公方よりの御供惣じて六十三人」とありますように、「公方御供」主体だったのです。ですから「したがひたてまつる僧六十余人」ということはありえないのです。ただしそこには、上人弟子十二人の「力者の棟梁」としての特別従駕は認められ、しかもその「力者の棟梁」としての中核的役割も公認もしくは黙認されていて、実質は門弟子十二人主、公方力者・供衆五一人従の護送集団を形成、その門弟十二人力者中の「棟梁の棟梁」として、角張成阿が総指揮をとったということが真相だったのです。

『四十八巻伝』は、この「事実上の実態」を「本来的な事実」とみなして、角張成阿をはじめからの力者総棟梁扱いし、進んで、力者・供衆六十余人すべて角張棟梁指揮下の供衆すなわち「僧供衆」とすることができたのです。

十分に「いわれある虚構の真実」だったのです。「罪人藤井元彦配流」ではありません。「法然上人他国行き」の形をとることができたのです。上人にとってこの上ない名誉の回復です。「成阿またここにあり」の感を禁じえないのです。

ところが、一般の角張成阿評は、まことに冷たいのです。成阿が、この法然伝記の正伝に登場するのは、ここだけです。その終わり初物の出番も、輿をかく力者棟梁とあっては、その他大勢の中のエクストラではないか――そういうコンテクスト（論法）なのです。

「三心・四修」とか、「一念義・多念義」とか、何かそういう高尚な話でないと一級扱いしない「学者念仏」（スコラ念仏）が、不知不識の中に、宗門・宗学の常識のようなものになってしまって、「愚痴にかへりて極楽にむまる」法然念仏の基本綱領など、床の間の飾り物のようになりつつある現状がその背景をなしています。力者棟梁これにありなどということ、そこではカリカチュアにもなりえなかったのです。

「念仏往生の義を、かたくもふかくも申さん人」は「こざかしく機の沙汰を」する者、「つやつや本願をしらざる人と心得べし」。上人はきびしくこうまでおっしゃっているのです。「ただ信ずることによってのみ」（ソーラ・フィディ）義とされるのです。「最後の御ともなりとて御輿をかく」。その義に王法も三舎を避けて、師弟親縁の念仏に道を譲るのです。